

ホーソーンの「ラパチニの娘」の一研究

重 山 巖

I

1842年7月9日ホーソーンはソフィア・ピーボディと結婚し、コンコードの有名な旧牧師館に居を定め、45年迄そこで幸福な生活を過ごしている。その間彼は近所に住む超絶主義者達、エマスン、ソロー、マーガレット・フラー、A.B. オルコット等と交際している。

この所謂旧牧師館時代にホーソーンは「ラパチニの娘」“Rappaccini's Daughter”を書いている。これは1842年の秋以降、恐らく1844年の秋に書かれたといわれている。最初1845年、この時代の他の多くの作品同様、雑誌 *The Democratic Review* に掲載され、後1846年『旧牧師館の苔』*Mosses from an Old Manse* に収録されている。

この作品の序で、その生涯のこの時代を反映してか、ホーソーンは M. del'Aubépine という架空の作家の名を借りて、当時の文学の世界に於ける——それは現在文学史的に見ても正鵠を得たものといえる——自分の立場 (an unfortunate position between the transcendentalists . . . and the great body of pen-and-ink men who address the intellect and sympathies of the multitude.¹⁾) を述べ、続いて、己れの作品全般に見られる特徴を簡単に記している。

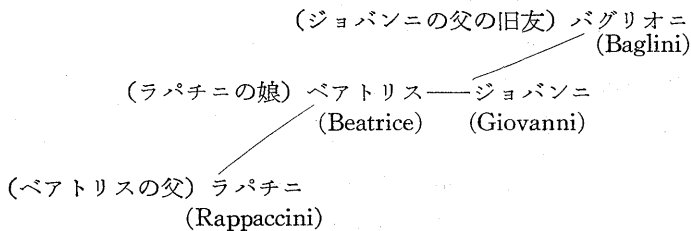
この序は、ホーソーンの他の作品の序同様、物語の主要部で語られている事柄、その意味に対して、その主要部だけでは明白にならない、彼がこの作品に寄せる、意図及び意味を与えるものである。

1) Geoffrey Moore (ed.), *American Literature*, (London: Faber & Faber, 1964), p. 278.

この小論の目的は、物語の主要部で彼が何を問題にし、何を語っているのかという問題を考え、更に、上にその要点を述べた序は物語の主要部に如何なる意味を与えているかという問題を考え、そのことによってこの作品全体の意味を考えることにある。

II

物語の主要部でホーソーンが何を問題にし、何を語っているかという問題を考へて行くに当って、先ずその人物構成を図式化しておくことにする。



ベアトリスはラパチニが毒によって育てた娘で、バグリオニはジョバンニの父の旧友である。そして、バグリオニとラパチニとの間には学問上の確執があることになっている。

この四人の登場人物の関係のうち、物語で主に語られているのは、いうまでもなく、ジョバンニとベアトリスとの関係である。しかし、この二人の関係に、ラパチニとバグリオニとの関係が重なり、絡み合っている。この二人は夫々自分の娘、旧友の息子を通して、暗黙のうちに相對峙し、ラパチニはジョバンニを、バグリオニはベアトリスを、相手から奪い合うという関係にある。

それ故、この物語の主要部でホーソーンが何を問題にし、何を語っているかという問題を考える場合、この四人のうちの誰一人をも除外してはならない。常にこの四人を念頭に置いて論じなければならない。

しかし、その前に、この四人の人物は夫々如何なる人物であるのかという問題を考えておく必要がある。その順序として、便宜上、ラパチニとバグリオニを先に考え、次いでベアトリス、ジョバンニを考えることにする。

ラパチニとバグリオニ

この二人は科学者であるという点では、所謂ホーソーンの head の系列に属する人物である。只両者の違いはバグリオニのジョバンニに対する言葉の中で語られているように、ラパチニは、科学のため、己れの知恵を増すためならば、如何なる手段をも選ばない人間 (... he [*i.e.* Rappaccini] cares infinitely more for science than for mankind.²⁾) であるということである。彼は、己れの目的(上述の一般的目的は別にして、それが何んであるかは後述する)のために、自分の娘ベアトリスをも犠牲にして、彼女を毒をもって育てているのである。

一方、ラパチニの庭の外の世界を代表して、ラパチニとベアトリスに対する見解を述べる代弁者としての役割も果しているバグリオニは、一応人間に許される研究の限界を知っているかのように見える科学者で、ラパチニに対して密かに警嘆の念を禁じ得ないが、常に彼に対する対抗意識を抱き、その計画を挫折させようとする人間である。

“We will thwart Rappaccini yet,” thought he [*i.e.* Baglioni], . . . “but, let us confess the truth of him, he is a wonderful man . . . a wonderful man indeed ; a vile empiric, however, in his practice, and therefore not to be tolerated by those who respect the good old rules of the medical profession.”³⁾

バグリオニは、自分を頼ってパデュア市に勉学に来た旧友の息子ジョバン

2) *Ibid.*, p. 283.

3) *Ibid.*, p. 295.

ニをラパチニが或る実験のために利用しようとしていることを、許せないと
思う。

The youth [*i.e.* Giovanni] is the son of my old friend, and shall not come to any harm from which the arcana of medical science can preserve him. Besides, *it is too insufferable an impertinence in Rappaccini, thus to snatch the lad out of my own hands*, as I [*i.e.* Baglioni] may say, and *make use of him for his infernal experiments*. This daughter of his! It shall be looked to. Perchance, most learned Rappaccini, I may foil you where you little dream of it!⁴⁾

そして、ジョバンニをラパチニの手から救い出すという目的もあるが、それ以上に、最初のジョバンニとの会見の場面で、“... her father destines her mine!”⁵⁾ と述べたことから考えられるように、バグリオニはベアトリスをラパチニの手から奪うことを目的としている人間である。それが如何なる意味を持つものであるかは後述することにする。

ベアトリス

次に、ベアトリスとは、人物とはいえないかもしれないが、如何なる人物かということを考えることにする。ジョバンニよりも先に考える理由は、いわば象徴的中心ともいえるベアトリスに対するジョバンニの考え方、心的態度の動きを追うという形でこの物語の各場面は結びつけられ、語られて行くからである。

ベアトリスはラパチニの庭の中央にある泉水 (... there was the ruin of a marble fountain in the centre, sculptured with rare art, ...⁶⁾) とそのまた中央に生える猛毒の植物 (There was one shrub, in particular, set in a marble basin in the midst of the pool, that bore a profusion

4) *Ibid.*, pp. 287-288. Italics are mine.

5) *Ibid.*, p. 284.

6) *Ibid.*, p. 280. Italics are mine.

of purple blossoms, each of which had the lustre and a richness of a gem; and the whole together made a show so resplendent that it seemed enough to illuminate the garden, even had there been no sunshine.⁷⁾ とが incarnate した存在といえる。

この泉水とその美しさは彼女の姿、心、魂の美しさとその immortality [good] を、この植物の美しさとその毒性は彼女の姿の美しさとその mortality [evil] を象徴するものであると解することができる。

彼女とこの植物との関係を裏付ける例は枚挙に暇もない程あるが、彼女と泉水との関係に就いて上のように述べた理由は、この泉水の立てる水の音をジョバンニに、“an immortal spirit” の泉水の音のように、ホーソーンが聞かせていること、(A little gurgling sound . . . made him [*i.e.* Giovanni] feel as if *the fountain were an immortal spirit* . . .⁸⁾), 更に、彼女の心と泉水とを関連させて次のように述べていることによる。

. . . recollections of many a holy and passionate outgush of her heart, when the pure fountain had been unsealed from its depths . . .⁹⁾

彼女が、先に述べた如く、この泉水と植物が一緒になり、incarnate した存在であることは、この植物が泉水の水を吹い上げているということ (All about the pool into which the subsided grew various plants, that seemed to require a plentiful supply of moisture for the nourishment of gigantic leaves . . .¹⁰⁾) もその論証となるが、怒りに駆られたジョバンニに対する彼女の次の言葉が、なお一層はっきりとした論証となろう。

I dreamed only to love thee and be with thee a little time; for, Giovanni, believe it, *though my body be nourished with poison, my spirit is God's*

7) *Loc. cit.*

8) *Loc. cit.* Italics are mine.

9) *Ibid.*, p. 296.

10) *Ibid.*, p. 280.

*creature, and craves love as its daily food.*¹¹⁾

更に、この泉水が“marble”でできていること、この植物が“a marble basin”¹²⁾の上にあるということは、heartがある点大いに異なるが、「クリスマスの宴会」“The Christmas Banquet”の主人公ジャービス・ヘイスティングズ (Jervayse Hastings) のように、ベアトリスは孤立した存在であった、ジョバンニを知るまではそうであったことを意味する。

こういったベアトリスは、ジョバンニと知り合うことにより、始めてあの植物、自分の毒性、negativeな面、evilを忘れ(“For the first time in my life!” murmured she, addressing the shrub, “I had forgotten thee!”¹³⁾)、その毒性故にジョバンニとの間に常に超え難い“the physical barrier”を置いているが、彼女自身述べているように(上の引用文11)彼女は真実ジョバンニを愛し、彼の真実の愛を求めることになる。

彼女が彼に

If true to the outward senses, still it may be false in its essence; but the word of Beatrice Rappaccini's lips are true from the depths of the heart outward.¹⁴⁾

と述べているように、もしこの自分の心から出た真実の言葉しかいわないベアトリスを、ジョバンニが、後で述べるように彼は始めからそのようなことのできる人間ではないのだから、誰かが、本当に信じ、愛することができたとしたら、彼女はevilの桎梏を逃れ、“a heavenly angel”と変身することができたのである。

11) *Ibid.*, p. 298. Italics are mine.

12) *Ibid.*, p. 280. Italics are mine.

13) *Ibid.*, p. 291.

14) *Ibid.*, p. 290.

... recollections which, had Giovanni known how to estimate them, would have assured him that all this ugly mystery was but an earthly illusion, and that, *whatever mist of evil might seem to have gathered over her, the real Beatrice was a heavenly angel.*¹⁵⁾

しかし、ジョバンニの彼女に対する怒りの言葉と、彼女は何の関係も、関心もないが、彼女に何かを企むバグリオニがジョバンニの手を通して彼女に渡す下毒剤によって、死に、殺される運命にある人間であった。彼女は自分が呪われた存在であるが故に、彼女の愛を受けるに値しない相手に対する自分の束の間の愛に殉じてしまうのである。何故ならば、彼女は己れの愛に殉ずることのできる人間であったからである。(... she was capable, surely, on her part, of the height and heroism of love.¹⁶⁾)

彼女は結局孤独のうちに死ぬことになるが、love によってホーソーンという participation を求めた人間といえる。彼女は死ぬ間際に次のようにいっている。

I would fain have been loved, not feared, ... Farewell, Giovanni! Thy words of hatred are like lead within my heart; but they, too, will fall away as I ascend. Oh, was there not, from the first, more poison in thy nature than in mine?¹⁷⁾

上の引用文の最後の文、ジョバンニの性質のうちには最初から彼女の性質にみられるものよりもっと強い毒性があったのではないかという彼女の言葉は、それが何を意味するかということはジョバンニの人物を考えなければ理解できないことである。

ジョバンニ

ジョバンニ・グアスコンティ (Guasconti) は、18 世紀の合理主義的

15) *Ibid.*, p. 296. Italics are mine.

16) *Ibid.*, p. 291.

17) *Ibid.*, p. 299.

なものの考え方を持っているが、その実体は a narrow minded coward with short insight であるといえることができる。合理的なものの考え方をすると、程度の差こそあれ、彼もラパチニ、バグリオニ同様、head に属する人間といえる。

ここで、物語の筋を追いながら、何故彼が上に述べたような人物であるのか考えてみることにする。

最初に、彼がラパチニとベアトリスに抱く関心は、この二人、特にベアトリスと、先きに述べたあの植物との関係を一見合理的に見極めることであった。

... Gionvanni could not determine how much of the singularity which he attributed to both [*i.e.* Rappaccini and Beatrice] was due to their own qualities and how much to his wonder-working fancy; but *he was inclined to take a most rational view of the whole matter.*¹⁸⁾

彼は、ラパチニに対しては恐怖を、ベアトリスに対しては、植物と同じ、何か危険なものを、始めて彼等二人を下宿の窓から見た時（第一の場面）感じ取っていたのである。

しかし彼がバグリオニに対して、

“Methinks he [*i.e.* Rappaccini] is an awful man indeed,” remarked Guasconti, ... “And yet, ... is it not a noble spirit? Are there many men capable of so spiritual a love of science?”¹⁹⁾

と尋ねている言葉（第二の場面）から分る通り、合理主義者ジョバンニはラパチニに対して恐怖と、同時に或る親近感を抱いているのである。何故ならば、上にも述べたように、彼もまた、ラパチニと同じ、head の系列に属する人間であるからだ。

18) *Ibid.*, p. 282. Italics are mine.

19) *Ibid.*, p. 283.

処で、ラパチニに対するジョバンニの関心はこれ以上に発展せず、彼の関心は急速にベアトリスに向って行く。それは、この美しいが、危険な女性性は、ラパチニ同様、素晴らしい科学者であることをバグリオニから聞かされたためでもある。

次に（第三の場面）、ジョバンニはベアトリスの表情の“simplicity and sweetness”に心打たれるが、彼女の傍に来た“a... reptile”“a beautiful insect”が他にこれとって何の原因もないのに死ぬのを見、更に、彼が窓から投げ与えた花束が彼女の手握られると枯れ始めるのを見て、彼はそれから数日間彼女を見ることを避けて暮らすことになる。合理主義者の彼には、自分が見たものが夢なのか、現実なのか、区別できないのである。

その間に、彼の心にはベアトリスに対する愛と恐怖の混ざり合った感情 (a wild of spring of both love and horror) が芽生え、成長し、“hope”と“dread”が彼の胸中で絶えず葛藤を演じ始めることになる。

Giovanni knew not what to dread; still less did he know what to hope; yet hope and dread kept a continual warfare in his breast, alternately vanquishing one another and starting up afresh to renew the contest.²⁰⁾

この物語の主要部に於いて示す彼の姿は、ベアトリスに対する“love”と“horror”に基づき、“hope”と“dread”の間を行き来し、“love”を強力に支える彼女に対する“faith”を持ってないまま、彼女に対する“suspicion”に負けて行く姿といえる。

ジョバンニはパデュアの郊外（第四の場面）で、バグリオニから——彼はラパチニの庭に決してその姿を現わさない——彼が既にラパチニの実験の材料となり、その実験にベアトリスも或る役割を演じているのではないか（... what part does she act in this mystery?）といわれる。バ

20) *Ibid.*, p. 286. Italics are mine.

グリオニのベアトリスに関するこの言葉は、それが断定の言葉でないだけになおのこと、効果的な一つの刺戟となつて、ジョバンニに彼女に対する“suspicion”を抱かせる原因となる。

ここで彼の運命は、下宿のおかみにラパチニの庭に通ずる秘密の戸を教えられることにより大きく転換して行く。彼は更に急速にベアトリスと親しくなつて行く。彼の胸の中で“hope”が勝利を収めるかに思われるが、“dread”はなお消滅せず、存在し、“hope”と葛藤を演じ続ける。それどころか、彼と彼女との間にある“the physical barrier”を超えることができず、逆に“dread”に基づく“suspicion”に捉らえられて行く。

At such times he was startled at the horrible suspicion that rose, monster like, out of the caverns of his heart and started him in the face; his love grew thin and faint as the morning mist, his doubts alone had substance.²¹⁾

合理主義者ジョバンニは、“the mysterious, questionable being whom he had watched with so much awe and horror”²²⁾ から“the beautiful and unsophisticated girl whom he felt that his spirit knew with a certainty beyond all other knowledge.”²³⁾ へと移り変わるベアトリスの姿を見、その実体はどちらであるのかきめることができないのである。

次に（第五の場面）、バグリオニがジョバンニの部屋に現われ、彼にジョバンニは恐ろしい運命、死が彼を待ち受けていることを知らされる。しかし、ジョバンニはベアトリスも救い出せるかもしれないという希望をバグリオニに持たされる。そして、ジョバンニはバグリオニから先に述べた下毒剤を渡される。但し、ベアトリスに先に飲ませて、その結果を見てから飲むようにいわれる。

バグリオニが帰つた後、ホーソーンはジョバンニを鏡に向わせること

21) *Ibid.*, pp. 292-293.

22) *Ibid.*, p. 293.

23) *op. cit.*

により、彼の“vanity”，感情の“a certain shallowness”，その性格の“insincerity”を映し出し、彼に次のように思わせている。

“At least,” thought he [*i.e.* Giovanni], “her poison has not yet insinuated itself into my system. *I am no flower to perish in her grasp.*”²⁴⁾

先に見たように、ラパチニの彼に対する実験にベアトリスも何かかかわりがあるのではないかといったバグリオニの術中に彼はここで完全に落ち入ってしまったのだ。

彼が思ったように、確かに、彼はベアトリスに掴まれて枯れてしまう花ではない。しかし、実際は、彼は既にラパチニによって、彼女と同じ存在、毒にも、従って彼女にも接することのできる存在、にされてしまっていたのだ。それ故、彼の考えの意味することとは裏腹に、皮肉にも、それがその儘真実となっているのである。彼は自分の吐く息で蜘蛛を殺すことができることを知らされる。これが合理主義者ジョバンニがそれと知らずに“dread”していたことなのである。

絶望と怒りに駆られ、先きの葉を持って、ジョバンニは、ベアトリスを殺したいような気持ちで、彼を待つ彼女の下に急いで行く。

彼は結局、このように恐ろしい形で実現された“horror”，“dread”，“suspicion”に打ち負かされてしまったのである。もし彼が彼女に対する本当の愛と“faith”を持っていたら、彼女が“a heavenly angel”に変身得るということを彼は知り得た筈なのである。しかしながら到底合理主義者ジョバンニにはそれは見抜けることはできなかったのだ。大体、彼には本当の愛と信頼の拠り処となる深い心を持っていなかったのだから(Guasconti had not a deep heart . . .)。

最後の場面に見られる彼の姿は、先にも述べた通り、a narrow-minded

24) *Ibid.*, p. 296. Italics are mine.

coward with short insight といえる。

ジョバンニとベアトリスは庭の中央、泉水とあの植物の傍にいる。二人の間には、もう既に、“a gulf of blackness”が生じてしまっている。心の狭いジョバンニは自分の方からベアトリスに近づいて行ったのにもかかわらず、そのことによって彼にもたらされた運命を受け入れることができず、バグリオニの言葉通りベアトリスがラパチニと協力して彼を落し入れたと一途に思い込み、彼は彼女を呪い、言葉激しく詰る。しかし、ベアトリスは何の関係もなく、ラパチニ一人の企みであることを聞き、既に自分が彼女の自分に対する気持を、元に復することができない程、徹底的に傷つけてしまいいながら、彼は自分が彼女に対して実際何をやったか分らないのである。(But Giovanni did not know it)。

この洞察力に欠ける男は、彼女との関係を再び元に帰えすことができると思い、例の薬を彼女に渡す。しかし、この臆病者は、共にその薬を飲もうともせず、バグリオニの言葉通りに、その結果を待つことになる。しかも、ベアトリスに、己れの死を悟っているような“a peculiar emphasis”をもって、“I will drink; but do thou await the result.”といわれて、その結果を待つ破目になってしまうのである。

こうしてベアトリスは死に、ジョバンニは一人残されてしまう。そしてラパチニの敗北と、バグリオニの一応の勝利という形で、物語は終わっている。

以上、三人の登場人物、続いてジョバンニのことを述べながら、物語の荒筋を見て来た訳だが、一応、この時点で、先に図式化した四人の登場人物の関係に就いて、如何なることがいえるか考えてみることにしたい。

この時点では、先ず次のことがいえよう。即ち、ラパチニを筆頭として、次にバグリオニその次にジョバンニと並べられる、三人の head に属する

人間が、愛を求めるベアトリス、heart に属する人間に、その愛を得させないことにより、また与えないことにより、孤立させ、そのままの状態で死なせてしまったということである。愛とは、ホーソーンがソフィア・ピーボディに宛てた恋文の中で、

Indeed, we are but shadows; we are not endowed with real life, all that seems most real about us is but the thinnest substance of a dream,—till the heart be touched. That touch creates us,—then we begin to be—there by we are beings of reality, and inheritors of eternity . . .²⁵⁾

と述べた、人間の心と心とを結びつけるもの、後に彼が「イーサン・ブランド」“Ethan Brand”の中で述べている、あの“the magnetic chain of humanity”の別名であって、愛とは人間を孤立から“participation”へ回帰させるものなのである。

この意味合いに於いて、この物語の主要部に、孤立から“participation”への回帰の問題をheadの対極としてのheartの問題として捉らえていゝるホーソーンの生涯変わることのなかった主題を、窺うことができる。

しかし上に述べたことだけでは、それは確かに、最初に述べたように、四人の登場人物のうち誰一人として除外はされてはいないが、余りにも取捨してしまった問題が多過ぎて、この物語の主要部に見られる総ての問題を踏まえた上での解答、ホーソーンがここに述べていること総てに対する抱括的解答、とはなり得ない。

それ故、次ぎに、先の四人の関係のうちに見た対立関係にあるラパチニとバグリオニに焦点を合わせて、この四人の關係に就いて、如何なることがいえるか考えることにする。処で、ラパチニは、あの泉水によって象徴されるベアトリスのpositiveな面、immortality, goodの持つ真の強さ、

25) F.O. Matthiessen, *American Renaissance* (New York: Oxford Univ. Press, 1941). p. 255.

丁度泉水があたりの荒廃を知らぬげに不滅の精神、心の歌を歌っている (... as if the fountain were an immortal spirit that sung its song unceasingly and without heeding the vicissitudes around it, ...) ように、彼女の精神、即ち心の不滅を全く信んずることができず、この世の総べての“evil”に耐え、打ち勝つことができるようにするために彼は彼女を毒をもって育てていたのである。このことは、それまで殆んど口らしい口を利いたことのなかったラパチニが、最後のベアトリスの死ぬ場面で、自ら明らかにしている。

“Miserable!” exclaimed Rappaccini. “What mean you [*i.e.* Beatrice] foolish girl? Dost thou deem it misery to be endowed with marvellous gifts against which no power nor strength could avail an enemy—misery, to be able to quell the mightiest with a breath—misery, to be as terrible as thou art beautiful? Wouldst thou, then have preferred the condition of a weak woman, exposed to all evil and capable of none”²⁶⁾

そして、こういう目的で育てた孤独のベアトリスに、ラパチニは、彼女の毒にも耐えられるようにジョバンニを変えて、与えようとしたのである。

“My daughter,” said Rappaccine, “Thou art no longer lonely in the world. Pluck one of those precious gems from they sister shrub and bid thy bridegroom wear it in his bosom. It will not harm him now. My science and the sympathy between thee and him have so wrought within his system that he now stands apart from common men, as thou dost, daughter of my pride and triumph, from ordinary women. Pass on, then, through the world, most dear to one another and dreadful to all besides !”²⁷⁾

この点、ラパチニはこの世の悪の力しか信んずることができず、ベアトリスがジョバンニに “... the garden is his world” と述べていることから、彼はこの世に悪の存在しか認め得なかった人物といえる。

26) G. Moore (ed.), *op. cit.*, p. 299.

27) *Loc. cit.*

一方バグリオニは、前にも述べた如く、ラパチニに対して常に対抗意識を抱いていて、“her father destines her mine”と一人極め込んで、ベアトリスを毒をもって育てるラパチニの計画を挫折させることを、ジョバンニが彼の元を訪ねて来る以前から、計画していたといえる。しかし、ジョバンニが現われるまでは、この自ら己れをラパチニと学問上肩を並べ得る者と考えているバグリオニ (The truth is, our worshipful Dr. Rappaccini has as much science as any member of the faculty—with perhaps one single exception—in Padua, or all Italy; . . .²⁸⁾) には、ラパチニの計画を挫折させる、即ちベアトリスを彼の手から奪い取る手段はなかったと思われる。ところが、そこへジョバンニが現われることにより、形の上ではジョバンニにベアトリスを与えるという最も効果的な計画、丁度ラパチニの計画の逆の企てを実行に移すことによって、ベアトリスをラパチニの手から奪うこと、即ち、ラパチニの計画の挫折を目論んだと考えられる。

それ故、バグリオニは、ラパチニに対抗する者、即ち、悪の力を阻止しようとする人間といえよう。とはいっても、彼は善の力を信じ、善の存在しか認め得ぬ人間とはいえない。それは、彼があくまでも head に属する人間で、ラパチニに対抗するのに、彼が利用したのは、ベアトリスとジョバンニの間の愛ではなく、下毒剤、即ち科学でしかなかったのだからである。

バグリオニにとって、ジョバンニは旧友の息子であるよりは、むしろ自分のラパチニに対する企ての道具でしかなかったと考えられる。旧友の息子に対する立場からは、バグリオニはジョバンニをベアトリスから遠ざけようとするかに見えるが、かえって、そのことによって、ジョバンニをベアトリスに更に接近させ、彼女に対する “suspicion” を抱かしめ、ラパ

28) *Ibid.*, p. 283. Italics are mine.

チニの計画達成の最後の瞬間、即ち、バグリオニの勝利の時にするには最もふさわしい最後の瞬間に、バグリオニは自分の信んずる科学の力によって、ベアトリスをラパチニから奪う道具として、陰にジョバンニを利用していたのである。

また、バグリオニにとってベアトリスもラパチニの計画を挫折させるための道具でしかなかったといえる。これがバグリオニが“her father destines her mine”といっている言葉の意味するものだったのである。

それ故、バグリオニは、例の薬をジョバンニに渡す際、

But, . . . be of good cheer, son of my friend. It is not too late for the rescue. Possibly we may even succeed in bringing back this miserable child within the limits of ordinary nature, from which her father's madness has estranged her.²⁹⁾

とは述べながらも、一人クスクス笑い、“We will thwart Rappaccini yet . . .” といいいながら、一旦ジョバンニの下宿を出た後、密かに舞い戻り、ベアトリスの死の場面を高所より見ながら、彼が叫んだ言葉は、ベアトリスの死に対しては“horror”を感じながらも、その死を悼む言葉でもなく、自分の与えた薬がベアトリスに利目がなかったことにより、もはや救う道のなくなったジョバンニに対する同情の言葉でもなく、ラパチニに対する勝利の言葉 (Rappaccini! Rappaccini! is *this* the upshot of your experiment?) でしかなかったのである。

ラパチニを人間に許された領域を超える者として非難し、対抗して来たバグリオニも結局ベアトリスに死をもたらしたこと、ジョバンニを恐ろしい運命に落し入れてしまったことにより、人に許された領域を超えてしまった科学者となっている。

29) *Ibid.*, p. 294.

以上述べて来たことから分るようにラパチニとバグリオニは、夫々悪の存在しか認め得ぬ者、悪の存在を否定しようとする者として、ベアトリスとジョバンニを間に相争い、ラパチニは悪によってベアトリスとジョバンニを結びつけようとして失敗し、バグリオニも、表面的には一応勝利を収めたかに見えるが、矢張り、悪の存在を否定することにより、二人を結びつけようとして失敗したことになる。ラパチニもバグリオニも己れの科学、即ち、head により、ジョバンニを道具として、ベアトリス即ち、heart の問題を取り扱い失敗したことになる。

次に述べることは、ジョバンニにもいえることだが、ラパチニは、ホーソーンが、この作品を書いた同じ旧牧師館時代に『アメリカン・ノートブックス』*American Notebooks* に、人の心を洞窟に譬えて記した、あの内奥の明るい世界 (... These are the depths of the heart, or of human nature, bright and peaceful; the gloom and terror may lie deep; but deeper still is the eternal beauty.³⁰⁾) の存在を知り得なかったのである。また、バグリオニも、矢張りこの同じ時代にホーソーンが書いた「大地の大燻祭」“Earth’s Holocaust” に於いて述べている、人間の心の深奥に存在する人間の総ての悪の出所である、あの小さいがしかし無限の領域 (the little yet boundless sphere wherein existed the original wrong of which the crime and misery of this outward world were merely types.³¹⁾) の存在を知り得なかった、たとえ仮りに知っていたとしても、それを科学 “intellect” により清めることができると考えた点、重大な過失を犯した人間であったといえる。

以上述べたことが、現在の段階で、ホーソーンが、この物語の主要部で、

30) Malcolm Cowley (ed.) *The Portable Hawthorne*, (New York: The Viking Press, 1948), p. 564. Italics are mine.

31) *Ibid.*, p. 209.

四人の登場人物を通して、述べていることといえよう。

しかし、問題はまだ残っているのである。ラパチニは悪の存在しか認めない人間、バグリオニは悪の存在を否定しようとする人間ということは上で明らかにした。それでは、この二人の間に介在するベアトリスとジョバンニとは果して如何なる人物であるのかということである。

ところで、ホーソーンは、最初の場面で、植物を観察しているラパチニを眺めるジョバンニに、

Was this garden, then, the Eden of the present world? and this man,
... was he the adam?³²⁾

という疑問を抱かせている。

ここにいわれているアダムという言葉から推して、その相手イヴはベアトリスになることは異論はなかろう。しかし、誰がアダムであるかということは少々問題になってくる。上の引用文をそのまま受け取れば、アダムはラパチニとなり、或る研究家が述べているように、バグリオニはこの“the Eden of the present world”, 或いは“the Eden of poisonous flowers”には関係のないものとして無視され、この物語は残りの三人のものとなり、ラパチニとベアトリスとの間に近親相姦の問題を見ることになろう。それはそれで或る程度説得力を持った説明となっているといえよう。

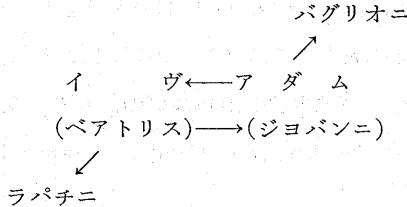
しかし、それでは今まで見て来たバグリオニの役割——無論パデュアの
人々を代表する、ラパチニとベアトリスに対する見解を述べる代弁者の役割をもっているが、ジョバンニに対する、彼の役割は全然無視されたことになり、この点が納得出来ない。

“... is he the adam?” という言葉は、矢張り、irony of statement

32) G. Moore (ed.) *op. cit.*, p. 281.

であって、アダムは始めからジョバンニと考える方がよいように思われる。

ここで、また、人物構成を図式化してみることにする。



この図式から明らかなように、ラパチニは、聖書とは逆にイヴに己れの創造したアダムをに与えようとし、バグリオニは、聖書の如く、アダムにイヴを与えようとしているのである。このことはラパチニ、その娘ベアトリス、バグリオニ、その旧友の息子ジョバンニという関係の背後に隠された関係であって、それはこの物語の主要部の意味を決定する重要な関係であったのである。そしてアダムとイヴを間に、悪の存在しか認めない人間、悪の存在を否定する人間を対立させ、最後にアダムにイヴを死なせるというのが、ホーソーンがこの四人の人物の関係の裏面に考えた構想ではなかったろうか。

ここで、このような聖書的人物構成を持ったこの物語に神は存在するのか、しないのかという問題を考えなければならない。いうまでもなくラパチニもバグリオニも神ではない。もしどちらか一方が神であれば、その計画は成功しなければならない。しかし、いずれも結局失敗してしまっている。彼等はベアトリスとジョバンニの二人にとって、似せものの gods であったとはいえる。そしてベアトリスは似せものの gods の手を逃がれ、この “the Eden of the present world” から本当のエデンの園に帰ったのである。

I am going, father, where the evil which thou hast striven to mingle with my being will pass away like a dream—like the fragrance of these poisonous flowers, which will no longer taint my breath among the flowers of Eden.³³⁾

一方、ジョバンニは似せものの gods に捉えられ、地獄に落ち、ホーソーンが第一の場面に先立って述べた、ダンテにより描かれたとされている彼の先祖と同じく、彼は生きながら地獄の住人の一人 (a partaker of the immortal agonies of his [*i. e.* Dante] Inferno) になってしまったのである。

それでは、何処に神が存在しているのだろうか。それは、ベアトリスが自分の心は“God’s creature”であるということから考えられる、彼女が good と evil との合一した存在であったということの背後にかくされているといえる。もし、この推論が正しいとすれば、相対立するラパチニとバグリオニとは、実際はベアトリスの背後にかくれた神と対立していたことになる。事実、ラパチニはこの世界に悪しか認めない人間、negative な力しかその存在を認めない人間、バグリオニは、丁度ラパチニを裏返しにした人間、この世界に悪が存在を認めない人間、negative な力の存在を認めない人間という点では異なっているが、彼等は科学者という点では一致している。それ故、彼等は夫々己れの考えに基づくこの世のエデンを創造しようと、同じ level で争い、ベアトリスの背後にかくれた神と対立していたのである。

ラパチニは神の手から奪ったと考えたベアトリスに、バグリオニからジョバンニを奪い、与える、即ち、本物のイヴに似せのアダムを与えようとし失敗し、一方、バグリオニは、ラパチニから、実際は神からベアトリスを奪い、自分のジョバンニに与える、即ち、似せのアダムに本物のイヴを与えようとして失敗したことになる。そして、その失敗の意味は、似せも

33) *Ibid.*, p. 299.

ののアダム、ジョバンニによる evil の否定、原罪否定、即ち、人間そのものの否定ということに集約される。ベアトリスの毒とは遠く原罪にその源を有する人間固有の罪を象徴するものであったのである。

以上述べて来たことが、*The Allegories of the Heart* という短篇集——これは結局実現されなかったが——を出版しようとした、この旧牧師館時代に、ホーソーンが、この四人の人物構成を持つ物語の主要部で語っていることと思われる。

III

最後に、今まで述べて来た物語の主要部とその序との関係から、この作品が如何なる意味を持つものであるかを考えることにする。ホーソーンは“the great body of pen-dand-ink men. . .” に対しては、同じ序で、自分の作品は allegory であるということによって一つの解答、即ち、よく読んでくれれば、自分の作品にも“the intellect and sympathies of the multitude” に訴えるものがあると述べることにより、一つの解答を与えている。しかし超絶主義者には序ではそのような解答は与えてはいない。それは物語の主要部が彼等に対するホーソーンの解答、即ち彼の考え方、人間存在に関する基本的認識を与えるものとなっているからである。

超絶主義者達は、チャニング(W.E. Channing)が *Moral Argument Against Calvinism* に於いて、

We are presumptuous, we are told, in judging of our Creator. But he himself has made this our duty, in giving us a moral faculty; and to decline it, is to violate the primary law of our nature. Conscience, the sense of right, the power of perceiving moral distinctions, the power of discerning between justice and injustice, excellence and baseness, is the highest faculty given us by God, the whole foundation of our responsibility, and our sole capacity for religion. Now we are forbidden by this faculty to love a being, who wants, or who fails to discover moral excellence.

God, in giving us conscience, has implanted a principle within us, which forbids us to prostrate ourselves before mere power, or to offer praise where we do not discover worth. . . .³⁴⁾

と述べているように、自らの良心に基づき、自らの目で自然、宇宙を見ようとした。しかし、彼等は直観的に善の存在しか認め得なかった。そして、善のない状態が、強いていえば、悪だと考え、悪の存在を否定してしまい、あげくのはてには、原罪すらも否定してしまった。

この悪を否定してしまったという点でバグリオニが超絶主義者に一番近いといえよう。しかし、合理主義者ジョバンニがペアトリスの実体を自ら認めようとして近づき、その悪を否定してしまうことになる点、上述の超絶主義者達の態度に極めて類似していて、ホーソーンはジョバンニに彼が超絶主義者達に見た姿を与えているのではないだろうか。

確かに、超絶主義者達は、始めは合理主義者ではない。しかし、ホーソーンは、彼等が上述の理論というものを持った瞬間から、彼等は合理主義者に随ってしまったと考えたのではないだろうか。この点、彼等はジョバンニ同様、“a deep heart”を持っていないことになる。そして、彼等はジョバンニと同じように、積極的に善を見たのではなく、この世にあまねく存在する悪に目がくらみ、圧倒的悪に恐れおののき、遂にはその悪を否定し、必死に、彼等が見たと思った善だけにしがみついていると、ホーソーンは考えたのではないだろうか。

この超絶主義者達の態度は、ジョバンニがペアトリスに善と悪が同時に存在することを認め得ず、彼女を死なしてしまったように、ホーソーンのかんがえによれば、それは矢張り、人間を生かすこと、より高次の“participation”の世界に導くことにはならず、遂に、現在より孤独の世界へ追いやられ、人間自体の否定にまでつながってしまうものと考えていたと解され

34) *Ibid.*, pp. 165-167. Italics are mine.

る。

それ故に、この作品に於いて、物語の主要部で、ホーソーンは人間存在の基本的考え方、good と evil のあり方、その実体、その二つのものに対する人間のとるべき行動というものを allegorical な手法で書き、そして、それを、そのまま超絶主義者批判に当てたと考えられる。これが、この作品に於いて、ホーソーンが究極的に問題にし、書き上げたことと考えられる。